

# VR 研究の問題点と意味分析

横山昌子

## 0 はじめに

中国語の動補式複合語 (Verb-Complement(V-R) Compounds, 以下 VR という) については、これまでにさまざまな立場から研究されてきた。しかし、VR を含む文 (以下 VR 構文という) が統語上あるいは意味上どのような構造として捉えられるのかについては一致した見解が得られていない。本論では、VR の先行研究の中から先駆的研究と最近の生成文法理論及び小節理論による研究を取り上げ、その主張を概観し、検討すべき点を提起する。また、それらの問題について、命題論理 (Propositional Logic) と述語論理 (Predicate logic) <sup>1)</sup>を用いた記述方法を用いて、意味論の立場から分析を試みる。

## 1 先行研究

### 1.1 先駆的研究

VR についての先駆的研究に、王力(1985[1943], 2002[1944])の研究がある。王力は、「動詞 - 結果補語」構造を統語的結合と捉え、使役関係を表す形式であると指摘した。また、Chao(1968) は、これを語の内部の結合による動補式複合語と捉え、二つの成分の結合について詳しく分析している。

#### 1.1.1 王力(1985[1943], 2002[1944])

王力は、《中国现代语法》(1985[1943])の中で、「述語と補語が因果関係に

あるもの」を“使成式”と呼んだ。たとえば、“弄坏”（壊す）は、“弄”（いじる）が原因、“坏”（壊れる）が結果であり、“坏”は“弄”が「～になるようにさせた」（“使成”）ことを表す。注目すべきは、王力は“弄坏”を“因为不弄就不会坏”（いじらなければ壊れなかった）を表すと述べ、原因と結果の間には「反事实的推論」が成り立つとと捉えていることである。これは、使役の定義としてしばしば引用される Shibatani(1976)<sup>2)</sup>が提示した考え方と基本的に一致する。王力は、“使成式”を句（“伪语”）とし、“弄坏”の“弄”は行為を表すので中心語（“中心”）で、“坏”は“弄”を制限しているので補語（“末品补语”）であると述べている。

王力は“使成式”を二種類に分けている。第一類は補語が形容詞で、ある行為が引き起こした状態を表すもので、次のような例を挙げている。

- (1) 是我弄坏了他了。(王力(1985[1943]):117)

（私がそれを壊したのだ。）

- (2) 你们把极小的事倒说大了。(王力(1985[1943]):117)

（あなたたちは些細のことを大げさに言った。）

第二類は、補語が自動詞のもので、これをさらに主要動詞が自動詞か他動詞かで二つの小類に分けている。主要動詞が他動詞の類は、補語（自動詞）と結合して他動詞句を構成し、その行為が引き起こした状態が受動者に起きたことを表す。

- (3) 黛玉用手轻轻笼住了束发冠儿。(王力(1985[1943]):118)

（黛玉はそっと髪飾りを抑えた。）

一方、主要動詞が自動詞の類は自動詞句を構成し、その行為が引き起こした状態は動作主に起きたことを表すと述べている。

- (4) 因为睡迷了，来迟了一步。(王力(1985[1943]):118)

（ぐっすり寝てしまい、ちょっと遅くなった。）

王力は、《中国語法理論》(2002[1944])の中で、VR の研究において現在も議論され続けているいくつかの問題についてすでに重要な主張を展開している。第一に、VR の結合については、独立した述語と補語の統語的な結合であるとした。VR を単語と見なさない根拠として、たとえば“弄坏”(いじって壊す)は“弄得坏”(いじって壊せる)や“弄不坏”(いじって壊せない)のように分離することができ、“弄”(いじる)と“坏”(壊れる)は明らかに語であるからであると述べている。第二に、VR の機能としては、欧米語が屈折や接辞によって“causative”を表現する形式を持つものと同じように、中国語では VR の結合形式によって“causative form”を形成していると述べている。ただし、“使成式”は欧米の“causative”と異なり、使役の方法に重点が置かれ、それを述語が叙述していると指摘している。たとえば、“缩短”(縮める=縮めて短くする)は、“删短”(削って短くする)、“割短”(切り落として短くする)“削短”(削って短くする)のように使役の方法部分を変えて表現することができる。このことから、王力は“使成式”は二つの概念の結合から成り、欧米の“causative”より複雑であると述べている。第三に、欧米語の“causative”にはない“使成式”の特徴として、“饿死”(餓死する)、“睡着”(寝つく)、“飞掉”(飛び落ちる)などのように自動詞的に用いられるものがあることに言及している。王力は自動詞的な行為にも結果はあり、「cause-effect」(原因-結果)の関係を表すことができると述べ、“饿死”などの自動詞的なものも“使成式”、すなわち“causative”といえるとしている。このことは、自動詞的 VR が他動詞的 VR と「cause-effect」という共通の意味構造を持っていることを示唆しており、本論ではこのような VR を「再帰的使役」と捉える。

### 1.1.2 Chao(1968)

Chao(1968)は、“吃饱”(食べて腹いっぱいになる)のような「動詞 - 結果補語」の結合を語彙的な複合語<sup>3)</sup>と捉え、「動詞 - 補語複合語」(Verb-complement(V-R) Compounds, 以下 VR 複合語という)と呼んだ(Chao1968: pp.435-480)。一方、同じように「動詞 - 結果補語」の結合で

あっても場所目的語をとる“坐在地下”（床に座る），“走到张家”（張家まで歩く）のような動補式や、“他唱的好听”（彼は歌うのがうまい）のような文については統語的な動補構造（Verb-Complement Constructions, 以下VR構造という）と捉えている。

Chaoによれば、VR複合語の補語は拘束的に動詞の後に続き、場所や程度を表す統語的VR構造よりもっと密接な方法で動作の結果を表わす。Chaoは、VR複合語はVRの二つの成分が自由(Free=F)か拘束的(Bound=B)か、生産的か制限的か、複合語として合成的か語彙的か、拡張できるかできないかのどちらの場合もありえると述べている。たとえば、“弄好”（うまくやる）は、二つの成分が共にFでかつ生産的であり、意味上合成的で、“弄不好”（うまくやれない），“弄的很好”（とてもうまくできた）のように拡張できる。Chaoは、このような複合語は、「臨時的」に語を形成していると述べている。一方、“克服”（克服する）は二つの成分が共にBで結合が制限的、固定的で、“\*克得很服”のように言うことができない。

また、ChaoはVR複合語が目的語を伴う構造について、主語と目的語のどちらが補語の動作主になるのかによって異なる特徴を持つと述べ、次のような例を挙げている。

(5) a. 我骂哭了他了。(私が彼を怒って泣かした。)

b. 你做累了事可以歇歇。

（あなたが仕事して疲れたならちょっと休んでいいですよ。）

(Chao1968:472-473)

(5-a)では、「泣いた」のは目的語の「彼」であり、(5-b)では、「疲れた」のは主語の「あなた」である。Chaoによれば、この違いは、“把”によって言い換えられるかどうかに反映される。前者のように補語が目的語に属している場合は“把”によって言い換えることができるが、後者のように補語が主語に属している場合は言い換えられないとしている。

(6) a. 我把他骂哭了。(私は彼を怒って泣かした。)

b. \*我把事做累了。

(Chao1968:473)

## 1.2 生成文法による統語的研究

VR の研究は、特に 90 年以降活発に議論されるようになり、生成文法、語彙概念構造、構文文法などの様々な理論を応用した分析がなされている。生成文法による分析では、VR を統語レベルの結合と捉えるか語彙レベルの結合と捉えるかで立場が異なっており、また他言語では見られない主語指向の VR をどのように捉えるかなどの問題で議論が分かれている。これらの議論の中心は、統語規則との整合性に置かれているが、VR 構文の統語的生成の妥当性を検証するには、正しく意味を生成できるかという角度からの考察が必要となる。そこで、最近の統語的研究の中から何元建(2011)と Sybesma, R.・沈阳(2006)を取り上げ、両者の主張を概観し、問題点を提起する。

### 1.2.1 何元建 (2011) の分析

何元建(2011)は、VR のこれまでの研究において議論となっている問題として、次の二点を挙げている。第一は、中国語の V1-V2 形式はすべて VR 構造なのかという問題である。これまでの研究では、主語指向の“他吃饱了饭”も、目的語指向の“他吃完了饭”も共に VR 構造と見なされてきた。しかし、最近の研究では他言語において結果補語がすべて目的語指向であることから、目的語指向の V1-V2 のみを VR 構造とするべきだという見方が提出されている<sup>4)</sup>。第二は、VR 構造は複合語なのか、あるいは統語上合成された形式なのかという問題である。

第一の問題について、何元建は、VR 構造には「動補型」と「非動補型」があり、動補型だけが目的語指向であると述べ、以下のような例を挙げている。

(7) a. 张三吃饱了饭。(張三のご飯を食べて腹いっぱいになった。)

b. 张三吃完了饭。(張三のご飯を食べ終わった。)

(何元建 2011:264)

何元建は、(7a)は“张三吃饭，张三饱了”という内容を表し、V1 と V2 は共に主語を指向するので「並列構造」の「非動補型」で、一方(7-b)は“张三吃饭，饭完了”という内容を表し、V1 は主語を指向し V2 が目的語を指向しているので「従属構造」の「動補型」であるとした。何元建は、このように捉えることで中国語の VR 構造が「補語は必ず目的語を指向する」という「直接目的語制限条件」(Direct Object Restriction=DOR)<sup>5)</sup>に適合しないという問題を解決できると述べた。つまり、「非動補型」は補語を含まないので DOR 適合の問題は起きず、「動補タイプ」は目的語指向なので DOR に適合する。

第二の問題については、V1-V2 構造を複合語と考えた方が中国語の言語事実に近く、また統語理論的に見ても経済的であると述べている。何元建は、目的語指向の V1-V2 構造はすべて二項動詞であるとし、「対格タイプ」(accusative)と「二項能格タイプ」(two-place ergative)に分類した。「二項能格」とは、たとえば次のような動詞である。

(8) a. 张三感动了李四。(張三は李四を感動させた。) <二項能格>

b. 张三感动了。(張三は感動した。) <一項能格>

(何元建 2011:268)

一方、対格動詞には一項対格動詞は存在しない。

(9) a. 张三批评了李四。(張三は李四を批判した。) <対格>

b. \*张三批评了。

(何元建 2011:269)

何元建によれば、(8b)のような一項能格動詞は使役者主語をとれるが対格動詞では不適格文となる。このような性質は V1-V2 複合動詞でも同様であると述べている。

(10) 这件事使 [张三感动了]。<[ ]内が一項能格動詞>

(このことは、張三を感動させた。)

(何元建 2011:269)

(11) \*这件事使 [张三批评了]。<[ ]内が対格動詞>

(\*このことは、張三を批判させた。) (何元建 2011:269)

(12) 张三打伤了李四。(張三は李四を殴ってけがをさせた。)

→\*张三使[李四打伤了]。<[ ]内が対格の V1-V2 動詞>

(何元建 2011:270)

(13) 张三吓呆了李四。(張三は李四を驚かせてぼかんさせた。)

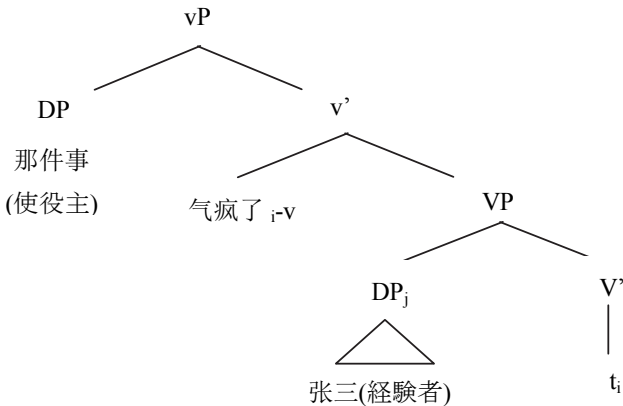
→张三使[李四吓呆了]。<[ ]内が一項能格の V1-V2 動詞>

(何元建 2011:270)

このことから、何元建は対格タイプの V1-V2 動詞は使役義を持たないが、二項能格タイプの V1-V2 動詞は使役義を持つと論じている。この使役義がどこから生じるのかについては、複合形式により使役義を持つという見方を否定し、“让”、“使”構文と同様に統語形式によると主張した。何元建は、次のような二項能格 V1-V2 文を、音声形式を持たないゼロ形式の使役輕動詞文とし、潜在的使動文<sup>6)</sup>と呼んだ。

(14) 那件事气疯了张三。(あの事は張三を怒らせた。)(何元建 2011:274)

(15)



(何元建 2011:274)

この樹形図中の *v* はゼロ形式の使役軽動詞で、音形形式を持つ軽動詞（“使”）に対応するため「使役主」の意味役割を付与することができるとしている。

### 1.2.2 Sybesma, R.・沈阳（2006）の分析

Sybesma, R.・沈阳（2006）は、VR 構造について、Hoekstra の提唱した小節（small clause）理論を取り入れた分析を行った。小節理論の仮説では、VR 構造の主節述語は非状態性の動作行為を表し、この動作は範囲や到達点を持たないが、簡単な主述構造からなる小節を補語にとることによって範囲や到達点を持つとされる。つまり、VR 構造の主節動詞は動作を表し、小節はそれによりもたらされた結果を表し、この二つが結合して一つの「動作 - 結果」事態を表す。Sybesma, R.・沈阳は、VR 構造は他動詞的構造と自動詞的構造を持つとしている。自動詞的 VR 構造は、外項（external argument）を持たず、補語として内項（internal argument）のみを持ち、内項は「補語小節」として現れると述べ、次のような例を取り上げている。

(16) 阿 Q 唱哭了。(阿 Q は歌って泣いた。) (Sybesma, R.・沈阳 2006:40)

この文の主要動詞“唱”は開放性の（動作内部に終点を持たない）動作を表し、同時に“唱”という動作行為が“阿 Q 哭”という結果事態をもたらしているため、基底構造では動詞“唱”は結果を表す補語小節“阿 Q 哭”を伴っているとされる。

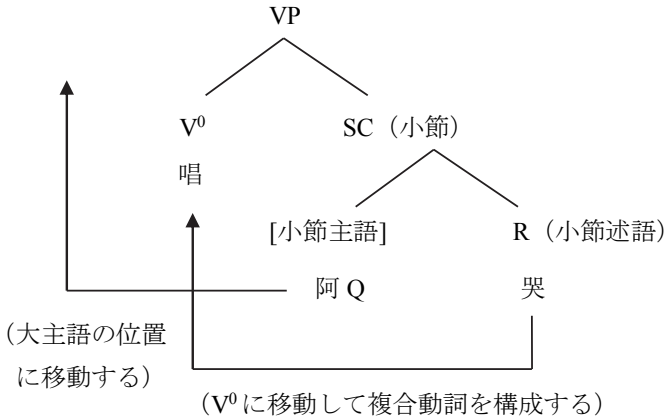
(17) 唱[sc 阿 Q 哭]（基底構造） → 阿 Qi [唱[ sc ti 哭]]  
(Sybesma, R.・沈阳 2006:40)

小節は、時制<sup>7)</sup>(tense)を持たず完全な文でないため、小節内の各成分は文法上許容される位置に移動すると考えられている。上記の例では、小節の主語“阿 Q”は、大主語の位置に移動して「格(case)」付与され、“哭”は



V<sup>0</sup> “唱” の位置に移動し併合して複合動詞 (verb compound) “唱哭” となる。

(18)



(Sybesma ,R.・沈阳 2006:41)

Sybesma ,R.・沈阳は、VR 構文の名詞句 NP の文法的性質について、「小節の主語名詞は小節の述語動詞とのみ統語的、意味的關係を結び、主節の述語とは直接的に関係しない」と主張している。たとえば、この文では、“阿 Q” が動作行為“唱”の主体のように見えるが、“阿 Q”と“唱”は統語的にも意味的にも何の關係もないと述べている。その根拠は、この文は以下の文と統語的にも意味的にも同じであるからだと説明している。

(19) 肚子笑疼了。 → 肚子 i [笑[ sc ti 疼了]]

(Sybesma ,R.・沈阳 2006:42)

この文では、主語の NP “肚子” は VR の補語“疼”と關係し“肚子疼”という意味を構成するが、“肚子笑”という意味は構成せず、NP は VR の述語 V と關係しない。

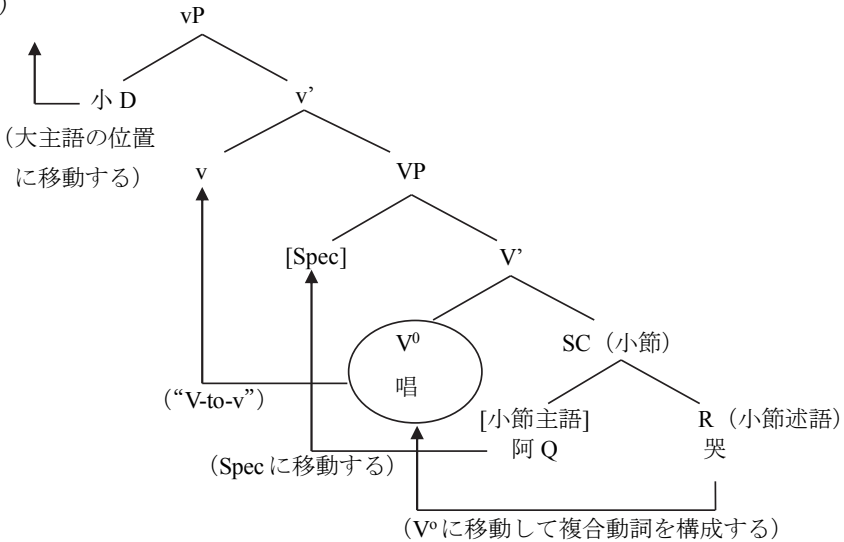
このように、小節理論による分析では、自動詞的 VR 文の主語 NP は小節の主語から移動したものと解釈される（つまり、自動詞的 VR の主語の NP は述語 V の内項ではないとされている）。また、他動詞的 VR 文でも、同様に分析できるとし、次のような例を挙げて生成過程を示した。

(20) a. 小 D 唱哭了阿 Q。（小 D が歌って阿 Q を泣かした。）

b.  $[_{VP}$  小 D  $[_{VP}$  唱  $[_{SC}$  阿 Q 哭]]（基底構造）

(Sybesma ,R.・沈阳 2006:41)

(21)



(Sybesma ,R.・沈阳 2006:41)

この分析では、他動詞的 VR 構造は、自動詞的 VR 構造と異なり、構造中に vP (small VP) 階層を持つ<sup>8)</sup>。この階層の機能は VP (large VP) が表す事態に「原因主」あるいは「使役主」を提供することであるとされる。Sybesma ,R.・沈阳は、このような生成過程は、文の主語と小節の主語が「動作主」と「対象」の関係であるように見える次のような他動詞的 VR 構造においても同様であると述べている。

(22) 小 D 打死了阿 Q。(小 D が阿 Q をなぐり殺した。)

(Sybesma ,R.・沈阳 2006:42)

Sybesma ,R.・沈阳によれば、(20) の“阿 Q”が述語“唱”の目的語でないのと同様に、(22)の“阿 Q”も述語“打”の目的語ではなく、基底構造は次のように分析される。

(23) 小 D [<sub>VP</sub>打<sub>SC</sub>阿 Q 死]

Sybesma ,R.・沈阳によれば、(22)“小 D 打死了阿 Q”は、(20)“小 D 唱哭了阿 Q”と同じ構造を持つので、述語“打”は小節の主語“阿 Q”とは統語的、意味的關係をとらない。感覚上“阿 Q”が“打”の「対象」であると感じるのは、「人間の脳の中のある種の百科事典的知識の連想にすぎない」と述べている。また、他動詞的 VR 文の主語の NP は、vP の Spec の位置に生成されるので、統語的、意味的には述語動詞 V の「動作主」ではなく「原因主」あるいは「使役主」であるとしている。たとえば、“小 D 唱哭了阿 Q”において“小 D”は、“唱”の「動作主」ではなく、“唱”が引き起こす出来事の「原因主」あるいは「使役主」と位置付けられている。Sybesma ,R.・沈阳は、そのことをより明白に示す例として次のような例文を挙げている。

(24) a.这篇文章写酸了我的手。

(この文章は、書くことで私の手を疲れさせた。)

b.这首歌唱哭了阿 Q。

(この歌は、歌うことで阿 Q を泣かした。)

(Sybesma ,R.・沈阳 2006:42)

上記の文の主語“这篇文章”と“这首歌”は明らかに、動詞“写”や“唱”の「動作主」ではない。小節理論による分析では、これらの文と“小 D 唱

哭了阿 Q”は構造的、意味的に同じであると捉えられている。また、“阿 Q 唱哭了”のような自動詞的 VR は、主要動詞と内項である補部小節から構成され外項を持たないので、表層構造上の主語は、次のように内項の小節の主語が移動して生成されたものとされている。

(25) 唱[sc 阿 Q 哭] → 阿 Qi[唱[ sc ti 哭]] (= (17))

### 1.3 問題点の提起

まず、何元建(2011)の主張について、次の二つの点を検討したい。第一に、何元建は目的語指向 VR と主語指向 VR は、前者が「動補型」で後者が「非動補型」であると述べているが、本論では主語指向 VR も「動補型」として統一的に説明できると考える。第二に、何元建は使役義を持つ VR を二項能格に限定し、二項対格は使役義を持たないとしているが、筆者は二項対格 VR も使役義を持つと考える。たとえば、前述の二項対格の例文“他哭湿了手帕。”、“他踢破了门。”は、それぞれ「彼が泣いて、(それにより)ハンカチが濡れるという状態にさせた」、「彼がドアを蹴り、(それにより)ドアが破れるという状態にさせた」という使役の意味を表している。これらが“\*他使手帕哭湿了。”、“\*他使门踢破了。”のように“使”構文に言い換えられないのは、対格 VR が二項能格 VR のように外部の使役主をとれないからであり、内部の使役関係を否定する根拠とはならない。

次に、Sybesma ,R.・沈阳(2006)の小節理論は、2 項分岐の統語的生成の中で VR 構造の結果補語の主体(小節理論では小節の主語)が表層構造の VR の目的語の位置に現れることを合理的に説明しているが、次の二つの点について異議を提起する。第一に、この分析では、“小 D 打死了阿 Q。”は、生成過程のどの段階においても“小 D”と“阿 Q”の間に“打”という意味関係が生起しえない。「小 D が阿 Q を叩く」という命題は少なくとも意味上では存在していなければならない。第二に、Sybesma ,R.・沈阳は“肚子笑疼了。”と“阿 Q 唱哭了。”を同じ構造と分析しているが、本論では“肚子笑疼了”は他動詞的 VR の目的語“肚子”が話題化されているも

ので、自動詞的 VR の“阿 Q 唱哭了。”とは異なる構造であると考える。

### 3 論理式による意味分析

本節では、前述の問題について、意味論の立場から分析を試みる。分析の手順としては、まず VR の基本的な意味構造を命題論理と述語論理を用いて論理式で表記し、VR の意味構造モデルとして提示する。次に、この論理式を基本にして、前述の四つの問題について具体的に分析する。

#### 3.1 VR の基本的な意味構造

本論では、Chao(1968) が述べているように VR は臨時的に構成された複合語と考える。VR は統語上では一つの動詞として機能するが、意味上 V と R はそれぞれ命題の述語として意味を構成する。また、一つの動詞として VR は他動詞的にも自動詞的にも機能する。本論では前者を他動型 VR、後者を自動型 VR と呼ぶことにする。ここでは、他動型 VR と自動型 VR の例文について命題論理と述語論理を用いて記述し、VR の基本的な意味構造を提示する。

##### 3.1.1 他動型 VR の意味構造モデル

他動型 VR には動詞 V が他動詞のものと、自動詞のものがあるが、まず V が他動詞の VR 構文の意味構造を記述しよう。このタイプの VR 構文には次のような例がある。

(26) 他打破了杯子。(彼はコップを割った。)

この文の VR “打破”は目的語“杯子”を伴う他動型 VR で、V “打”は他動詞である。V “打”と R “破”は、それぞれ“他打杯子”と“杯子破”という命題を構成している。これらを述語論理で記述すると、「打’(他, 被子)」、「破’(杯子)」となる。また、この文は全体として「彼ガ、コップニ、～トイウ状態ニサセタ」という使役の意味を含んでいる。使役を「～ガ～

ニ～サセル」という 3 項を持つ論理構造と捉え、使役関数を「CAUSE」で表すと「CAUSE ( $\alpha, \beta, \gamma$ )」という 3 項関数で表記できる。しかし、VR は V と R の結合により使役の意味を持つので、VR にプライム「'」を付し「VR'」と表記し使役を表す論理述語として用いることにする。この文では「打破'」が「CAUSE」として機能し、3 項関数「打破' ( $\alpha, \beta, \gamma$ )」を構成する。「～ガ」にあたる  $\alpha$  の値には、“他”が入り、「～ニ」にあたる  $\beta$  の値には、“杯子”が入る。「～トイウ状態ニ」にあたる  $\gamma$  には部分命題「打'(他, 被子)」、「破'(杯子)」を含む複合命題全体が生起する。これらを記述した全文の式は、次のようになる。なお、述語論理の表現は、述語にのみプライム「'」を付す簡易表記を用いる。

(26') 打破'[他, 杯子, 打'(他, 杯子)&破'(杯子)&有'{破'(杯子), 了}]

サセル	～カ'～ニ	～トイウ状態ニ			
$\alpha$	$\beta$	$\gamma 1$	$\gamma 2$	$\gamma 3$	

この式は「彼ガ、コップニ、彼ガコップヲタタキ、コップガ割レ、コップガ割レルコトガ完了シタ」という意味を表す。式中の  $\alpha$ 、 $\beta$ 、 $\gamma$  の三つ項に生起する意味について簡単に説明しておこう。 $\alpha$  項と  $\beta$  項には談話の意味が生起し、 $\alpha$  項は「話題<sup>9)</sup>」、 $\beta$  項は「副話題」を表す。 $\gamma$  項には文が内包する命題の意味が生起する。 $\gamma 1$  は、“他”が「動作主」、「杯子」が「対象」の「意味役割」を持つことを表す。 $\gamma 2$  は、持続動詞“打”(V)の持続動作が瞬間動詞“破”(R)によって「終息」し、「時相<sup>10)</sup>」が充足することを表す。 $\gamma 3$  では、[完了]によって広い意味での「着点」が表示されている。 $\gamma$  項のそれぞれの命題は一つの出来事として同時に成立するので連言「&」で結ばれている。また、 $\gamma 1$  の第 2 項が  $\gamma 2$  の第 1 項に入り、 $\gamma 2$  の式全体が  $\gamma 3$  の第 1 項に入り全体が連鎖しているので、意味はこの順番で生起する。

次に、VR の V が自動詞の場合の意味構造を記述しよう。このタイプの VR 構文には、次のような例がある。



いう「原因 - 結果」の意味関係が存在する。つまり、「子供が、子供（自分）に、子供（自分）が泣き目を覚ますことをさせた」という論理構造を持つ。これを論理式で表すと、次のようになる。

(28') 哭醒'[孩子,孩子,哭'(孩子)&到'(哭'(孩子)&醒'(孩子))&有'(醒'(孩子),了)]  
 サレル ～カ<sup>o</sup> ～ニ ～トイウ状態ニ  
 $\alpha$   $\beta$   $\gamma$

この式の「哭醒」は、他動型VRの式と同様に使役関数として機能している。 $\alpha$ は「話題」、 $\beta$ は「副話題」を表すが、ヴォイス的には「使役主」と「被使役主」の関係を表す。この式では $\alpha=\beta$ （すなわち使役主=被使役主）であるので、 $\alpha \neq \beta$ の使役構造とは異なり「他動性」を持たない。そこで、このような使役構造を「再帰的使役構造」と呼ぶことにする。

## 3.2 何元建（2011）における問題点の考察

### 3.2.1 目的語指向型 VR と主語指向型 VR

何元建(2011)は、中国語のVR構文には目的語指向と主語指向の両方があり、「直接目的語制限条件」(DOR)に適合しないという問題について、前者を動補型（従属構造）、後者を非動補型（並列構造）と分析することで解決できるとした。

(29) a. 张三吃饱了饭。(張三のご飯を食べて腹いっぱいになった。)

b. 张三吃完了饭。(張三のご飯を食べ終わった。)

(何元建 2011:264,再掲)

何元建によれば、(a)の主語指向のVRは並列構造の非動補型であるためDOR適合の問題は起きず、(b)の目的語指向のVRは動補構造でDORに適合する。この主張を検討するために、これらの文がどのように意味を構成するのか、意味構造を記述することにする。



次に、(b)の文も論理式で記述しよう。この文の“吃完”を目的語指向VRとして分析すると、次のような論理式で記述できる。

(29a')と(29b')の論理式を比べて見ると、両者は共に VR が使役関数として機能しているという点では共通しているが、目的語指向の(29b')は $\alpha$ と $\beta$ が異なる値を持つ「他動的使役」を表すのに対し、主語指向の(29a')は $\alpha$ と $\beta$ が同一の値を持つ「再帰的使役」を表わす。 $\gamma$ 項の複合命題が表す命題の意味(内包的意味)を考察すると、(29a')では“飯”は $\gamma 1$ において

動詞の対象の意味役割として現れるだけで、R “飽” とは意味的に関わらない。一方、(29b')では $\gamma 1$ だけでなく $\gamma 2$ と $\gamma 3$ にも現れ、R “完” と意味を構成する。しかし、3項関数の $\alpha$ 項と $\beta$ 項に注目すると、(29b')のR “完” が $\beta$ 項の個体“飯”を叙述し「完'(飯)」の意味を構成するのと同様に、(29a')のR “飽” は $\beta$ 項の個体“张三”を叙述し「飽'(张三)」の意味を構成している。このように、主語指向VRを再帰的使役構造と捉えることで、主語指向VRもDORに適応すると見なすことができ、主語指向VRと目的指向VRを統一的に解釈できる。

### 3.2.2 対格VRと二項能格VR

何元建は、次の(30b)のような二項能格VRは使役義を持つが(30a)のような対格VRは使役義を持たないとしている。

(30) a. 张三打伤了李四。(张三は李四を殴ってけがをさせた。)

b. 张三吓呆了李四。(张三は李四を驚かせてぼかんさせた。)

(何元建 2011:270,再掲)

しかし、筆者は(30a)の対格VR文は(30b)の二項能格VR文と同様に使役構造を構成すると考える。このことを明確にするために、上記の二つの例文を論理式で記述し考察してみよう。まず、(30a)の文の論理式を記述する。この文は、「张三が李四を叩く」と「李四がけがをする」という命題内容を含み、さらに「张三が李四を叩き、それによって李四がけがをする」という使役の意味を持つ。これを論理式で表すと次のようになる。

(30a') 打伤'[张三,李四,打'(张三,李四)&伤'(李四)&有'伤'(李四),了]

サセル	～ガ	～ニ	～トウ状態ニ
$\alpha$	$\beta$	$\gamma 1$	$\gamma 2$
			$\gamma 3$

次に(30b)の文について考えて見よう。“吓呆”は能格VRで自動詞的にも

他動詞的にも機能するが、この文では外部の使役主を持つ他動詞用法（すなわち二項能格）が用いられている。文全体の意味は「張三が李四を驚かし、それによって李四がぽかんとした」である。これを論理式で記述すると次のようになる。

(30b') 吓呆'[张三,李四,吓'(张三,李四)&呆'(李四))&有'(呆'(李四),了)]

サセル	～ガ	～ニ		～トウ状態ニ	
	$\alpha$	$\beta$	$\gamma 1$	$\gamma 2$	$\gamma 3$

このように、対格 VR と能格 VR の他動詞用法は共に、他動的使役構造を持つ。両者の違いは、能格 VR は、次のように自動詞用法もとれるという点である。

(31) 李四吓呆了。(李四は驚いてぽかんとした。)

この文の論理式は、 $\alpha = \beta$  の再帰的使役構造となる。

(31') 吓呆'[李四,李四,吓'(李四)&到'(吓'(李四),呆'(李四))&有'(呆'(李四),了)]

サセル	～ガ	～ニ		～トウ状態ニ	
	$\alpha$	$\beta$	$\gamma 1$	$\gamma 2$	$\gamma 3$

一方、対格 VR は“\*李四打伤了。”のように言うことはできないので、再帰的使役構造を構成しない。

### 3.3 Sybesma, R.・沈阳(2006)の問題点の考察

ここでは、Sybesma, R.・沈阳(2006)の小節 (small clause) 理論による分析で提示された自動型 VR の構造と他動型 VR の構造について検討する。

### 3.3.1 “阿 Q 唱哭了。”と“肚子笑疼了。”

Sybesma ,R.・沈阳 (2006) は、自動型 VR の例として次のような例を取り上げた。

(32) 阿 Q 唱哭了。(阿 Q は歌って泣いた。)

(33) 肚子笑疼了。(腹が、笑って痛くなった。)

(Sybesma ,R.・沈阳 2006:40,42,再掲)

小節理論による分析では、自動型 VR 構造は基底構造では外項を持たず、補部小節の内項のみを持つとされる。これに基づき、上記の二つの文の派生過程は次のように示されている。

(32') 阿 Qi [唱[ sc ti 哭]]

(33') 肚子 i [笑[ sc ti 疼了]]

Sybesma ,R.・沈阳によれば、(32)の文の“阿 Q”は“哭”の動作主であり、動作行為“唱”とは統語的にも意味的にも関係しない。Sybesma ,R.・沈阳は、その根拠として、(32)と(33)の文は統語的にも意味的にも同一の自動詞構造として分析でき、(33')の構造では“肚子”が“笑”と“肚子笑”という意味を構成しないことが明白だからであると述べている。

では、上記の議論の妥当性を検討するために、これらの例を命題論理と述語論理を用いて記述してみよう。前述したように、自動型 VR の意味構造は、再帰的使役構造として記述できる。これを用いて(32)の文を記述すると、次のような論理式になる

(32'') 唱哭' [阿 Q, 阿 Q, 唱' (阿 Q) & 到' {唱' (阿 Q), 哭' (阿 Q)} & 有' {哭' (阿 Q), 了}]

サセル ～ガ～ニ

～トイウ状態ニ

$\alpha$        $\beta$        $\gamma 1$

$\gamma 2$

$\gamma 3$

この式で、「唱哭'」は「～ガ～ニ～トイウ状態ニサセル」という使役の

意味を表す 3 項関数として機能している。式全体の意味は「阿 Q ガ、阿 Q ニ、阿 Q ガ歌イ、阿 Q ガ歌ウコトガ阿 Q が泣クコトニ至リ、阿 Q が泣クコトガ完了シタ」となる。論理式中の  $\alpha$  と  $\beta$  はそれぞれ談話的意味の「話題」と「副話題」を表すが、ヴォイス的には「使役主」と「被使役主」を表す。この式では  $\alpha$  と  $\beta$  が同じ値を持ち、使役主=被使役主なので、再帰的使役構造となっている。

次に、(33)の文の論理式を記述しよう。この文は「N1(動作主)+VR+N2(対象)」構造の N2(対象)を話題化した文である。すなわち、元の語順の文は“ $\phi$  笑疼了肚子”(誰かが笑って腹が痛くなった)と捉えることができる。この文は「誰かが笑う」という動作命題と「お腹が痛い」という結果命題を持つ。これらは論理式を用いて、それぞれ「笑'( $\phi$ )」、「疼'(肚子)」と表記できる。これらの命題を含む全体の式は、「笑疼'[ $\phi$ , 肚子, 笑'( $\phi$ )&有'( $\phi$ , 肚子)&疼'(肚子)&有'{疼'(肚子), 了}]」となる。元の語順の文に対し、(33)の文では対象の“肚子”が「話題」として取り上げられているので、3 項関数の  $\alpha$  には“肚子”が入る。また、副話題は“肚子”の所有者である「誰か」( $\phi$ )と捉えられるので、 $\beta$  には「 $\phi$ 」が入る。文全体の式は次のようになる。

$$\begin{array}{lcl}
 (33'') \text{ 笑疼' [肚子, } \phi, \text{ 笑' } (\phi) \& \text{有' } (\phi, \text{ 肚子}) \& \text{疼' } (\text{肚子}) \& \text{有' } \{ \text{疼' } (\text{肚子}), \text{ 了} \} \\
 \text{サセル} & \sim \text{ガ} \sim \text{ニ} & \sim \text{トイフ状態ニ} \\
 \alpha & \beta & \gamma 1 \qquad \qquad \gamma 2 \qquad \qquad \gamma 3
 \end{array}$$

この式では、 $\alpha$  と  $\beta$  の項は異なる値をとっており、他動的使役構造を構成している。すなわち、(32)と(33)の文は表層的には同じ自動型 VR 構文のように見えるが、異なる意味構造を持つ。このことから、二つの VR 構文は Sybesma, R.・沈阳が述べるような同一構造ではなく、(32)は再帰的使役構造の自動型 VR で、(33)は他動型 VR の派生と捉えられる。

### 3.3.2 他動型 VR の V と目的語の関係

Sybesma ,R.・沈阳 (2006) は、他動型 VR について、小節 (CS) を補部  
 取る VP がさらに使役階層 vP を持つ構造と分析している。この分析では、  
 他動型 VR の動詞 V が自動詞であっても他動詞であっても同様の構造を持  
 つ。たとえば、次のような例を挙げている。

(34) 小 D 唱哭了阿 Q。(小 D が歌って、阿 Q を泣かした。)

(35) 小 D 打死了阿 Q。(小 D が阿 Q を殴り殺した。)

(Sybesma ,R.・沈阳 2006:41,42,再掲)

小節理論による分析では、二つの文は次のような基底構造を持つとされる。

(34')  $[_{VP} \text{小 D } [_{VP} \text{唱}_{SC} \text{阿 Q 哭}]]$

(35')  $[_{VP} \text{小 D } [_{VP} \text{打}_{SC} \text{阿 Q 死}]]$

この分析では、(35)のように V に他動詞が用いられる場合でも、V と目  
 的語(N2)は統語的にも意味的にも関係を持たない。なぜならば、(35)の NP2  
 “阿 Q”は VP の補部である小節の主語であるからである。つまり、(34)  
 で“唱阿 Q”という動目関係が成立しないのと同様に、(35)でも“打阿 Q”  
 という関係は成立しない。しかし、“小 D 打死了阿 Q。”という文が成立す  
 るためには、動作“打”の対象は“阿 Q”でなければならない。これにつ  
 いて、Sybesma ,R.・沈阳は、「“打”の対象が“阿 Q”であるように感じら  
 れるのは、百科事典的知識の連想にすぎない」と述べている。

この点について、さらに詳しく考察するために、二つの文を論理式で記  
 述してみよう。まず、(34)の文は次のように記述できる。

(34'') 唱哭'[小 D,阿 Q,唱'(小 D)&到'唱'(小 D),哭'(阿 Q)&有'哭'(阿 Q),了]

サレル ～カ'～ニ

～ト付状態ニ

$\alpha$     $\beta$

$\gamma 1$

$\gamma 2$

$\gamma 3$

次に、(35)の文の論理式は以下のようなになる。

(35'') 打死'[小 D, 阿 Q, 打'(小 D, 阿 Q)&死'(阿 Q)&有'[死'(阿 Q), 了]]

サセル ～カ' ～ニ

～トウ状態ニ

$\alpha$   $\beta$

$\gamma 1$

$\gamma 2$

$\gamma 3$

(35'')の論理式では、 $\gamma 1$ の式に「打'(小 D, 阿 Q)」が生起し、第1項“小 D”が動作“打”の「動作主」で、第2項“阿 Q”が「対象」であることが現れている。命題の意味を表す $\gamma$ 項は、 $\gamma 1$ の第2項“阿 Q”が $\gamma 2$ の第1項に生起し、 $\gamma 2$ の式が $\gamma 3$ の第1項に生起し全体が連鎖することで、これらの意味がこの順に生起し、かつそれぞれの命題が一つの出来事として同時に成立することを保証している。よって、“阿 Q”は $\gamma 1$ において動作の対象として確定する必要がある。つまり、“打”の対象は、「他の誰か」ではなく“阿 Q”でなければならない。

#### 4 結び

本論では、VR について最近の研究の中からの何元建(2011)と Sybesma ,R・沈阳(2006)の生成文法理論による分析を取り上げ、四つの問題点を提起し、それについて述語論理による記述方法を用いて分析を試みた。何元建(2011)の主張については、第一に目的語指向 VR と主語指向 VR が共に動補型 VR として分析可能であることを論理式で示し、第二に対格 VR と二項能格 VR が共に他動的使役構造を持つことを論じた。Sybesma ,R・沈阳(2006)の小節理論による分析については、第一に“肚子笑疼了。”は“阿 Q 唱哭了。”と同構造の自動型 VR ではなく、他動型 VR の派生であることを論理式で示した。第二に他動型 VR の V と目的語の関係は構造上明示する必要があることを述べた。小節理論による他動型 VR の分析では、V と R が結合し複合動詞 VR となり、さらに外側の殻の主要部に移動して使役軽動詞になるとされる。この点では、VR が使役関数として文全体の意味を決定すると仮定した本論の意味分析と基本的に一致している。しかし、小節理論による分析では、VR の目的語(N2)と V が統語的にも意味的にも関係せず、動詞 V の対象 N2 が結果補語 R の主体になると

いう関係が構造上に反映されないという点で問題がある。VR 構文は、V と R の述語の語彙的意味や述語内部の時相構造と密接に関係している。VR の結合の仕組みを解明するためには、V と R が個別に構成する意味とそれがどのように結合するののかという視点からの分析が有効であると考ええる。本論では、そのような観点から数例の VR 構文について分析し、意味構造を論理式で示した。本論で示した意味構造によって多様な形式の VR 構文を統一的に説明できるかについては、さらに考察を進めたい。

## 注釈

- <sup>1)</sup> 命題論理、述語論理は、記号論理学の手法を自然言語の記述に応用したものである。命題論理は、命題（文）と命題（文）の関係を、&（連言）、∨（選言）、→（含意）、¬（否定）などの結合子を用いて記述する。また、述語論理は、命題の内容（内部構造）を述語（predicate）と述語が要求する項（argument）の組み合わせとして記述する。項の数により、1 項述語、2 項述語、3 項述語のように呼ばれる。
- <sup>2)</sup> Shibatani(1976)は、“The Grammar of Causative Construction”（pp.1-2)において、使役は二つの事態(event)の次のような関係を指すと定義している。
  - a. 二つの事態の関係について、話者が、結果事態（caused event）の発生時間（ $t_2$ ）は原因事態（causing event）の発生時間（ $t_1$ ）よりも後であると信じている。
  - b. 二つの事態の関係について、話者が、結果事態の発生は原因事態の発生に完全に依存していると信じている。つまり話者は、原因事態が起きなければ結果事態はその時に起きなかつただろうという反事実的推論を受け入れている。
- <sup>3)</sup> Chao(1968)は、複合語を、二つ以上の語（あるいは語素）が緊密に組み合わせたり一つの語を形成しているものと定義している。複合語は、成分の機能的な側面から、主述(S-P)複合語、並列複合語、主従複合語、動目(V-O)複合語、動補(V-R)複合語、複雑な複合語に下位分類される。



- 4) 何元建(2011:263)参照。
- 5) Simpson, J. (1983)が提唱した規則。
- 6) 潜在的使動文(原文は“隱形使動句”)に対し、明示的使動文(原文は“显性使動句”)は、“那件事使张三气疯了。”のような文とされている(何元建 2011: 274)。
- 7) 原文では“时态”(tense)を用いているが、「時制」と訳した。「時態」(aspect)の概念とは異なる。
- 8) 動詞句が外部の動詞句殻を持つという理論は、VP 殻 (VP-shell) 分析と呼ばれる。VP-shell 分析は、VP は外側の VP 殻 (shell) と内側の VP 殻 (core) に分離投射されるという理論に基づくもので、Larson により提案された(何元建 2011:pp.217-218 参照)。
- 9) VR の論理式の  $\alpha$  項と  $\gamma$  項には談話概念の「話題」が生起すると仮定した根拠は、中国語が類型論的に見て「談話概念構造化言語」に属するという見方に基づく(徐烈炯(2002)参照)。中国語の文は、「主語 - 述語」というよりは、「話題 - 解説」(topic-comment)と捉えられる。
- 10) 龚千炎(2012[1995])によれば、中国語の時間体系は時相 (phase)、時態 (aspect)、時間(tense)の三つの構造から形成される。「時相」は、「文の純命題の意味に内在する時間特徴を表し、主に述語動詞の語彙の意味によって決定される」(p.4)。動詞のうち、持続動詞は動作の「開始」時点のみを持ち「終息」時点を持たないが、瞬間動詞は動作の「終息」時点のみを持つ。VR は、持続動詞は瞬間動詞を伴うことで「開始 - 終息」の時相を持つと捉えられる。

## 参考文献

### [中国語]

- 方立 2000.《逻辑语义学》。北京：北京语言大学出版社。
- 龚千炎 2012(1995 初版).《汉语的时相时制时态》。北京：商务印书馆。
- 何元建 2011.《现代汉语生成语法》。北京：北京大学出版社。
- 李临定 2011.《现代汉语句型（增订本）》。北京：商务印书馆。
- Sybesma, R.・沈阳 2006.〈结果补语小句分析和小句的内部结构〉，《华中科技大学学报・社会科学版》第 4 期。
- 王力 1985.《汉语语法纲要》(1946 初版),《王力全集》(第三卷): pp.106-167。  
济南：山东教育出版社。
- 王力 1985.《中国现代语法》(1943 初版),《王力全集》(第二卷): pp.245-261。  
济南：山东教育出版社。
- 王力 2002.〈中国语法理论（节选）〉(1944 初版),《王力选集/二十世纪现代汉语语法八大家》: pp.159-164。长春：东北师范大学。
- 熊仲儒 2004.《现代汉语中的致使句式》。合肥：安徽大学出版社。
- 徐烈炯 2002.〈汉语是话语概念结构化语言吗?〉,《中国语文》第 5 期。
- 袁毓林 2001.〈述结式配价的控制—还原分析〉,《中国语文》第 5 期。
- 朱德熙 1982.《语法讲义》。北京：商务印书馆。

### [日本語]

- ウィトゲンシュタイン著、野矢茂樹訳 2003.『論理哲学論考』。東京:岩波書店。
- オールウッド・アンデソン・ダール著、公平珠躬・野家啓一訳 1979.『日常言語の論理学』。東京:産業図書。
- 加藤宏紀 2002.「現代中国語の「時相」と「時態」の意味研究」、『言語と文化論集』第 9 号: pp.167-183。神奈川大学大学院外国語学研究科。
- 白井賢一郎 1985.『形式意味論入門—言語・論理・認知の世界』。東京:産業図書。
- 杉本孝司 1998.『意味論 1—形式意味論—』。東京:くろしお出版。

松村文芳 2005. 「把構文」と「被構文」に用いられる「給」の意味と論理」、  
『語学教育研究論叢』第 22 号: pp.01-36。大東文化大学語学教育研究  
所。

横山昌子 2014. 「VR を基盤とした使役文」、『言語と文化論集』第 20 号:  
pp.239-258。神奈川大学大学院外国語学研究科。

ラドフォード, A. 著、外池滋生監訳 2006. 『入門ミニマリスト統語論』(新  
版)。東京:研究社。

[英語]

Chao, Yuen Ren. 1968. *A Grammar of Spoken Chinese*. Berkeley: University of  
California Press.

Radford, A. 2004. *English Syntax: an Introduction*, Cambridge University Press.

Shibatani, Masayoshi 1976. 'The Grammar of Causative Constructions: A  
Conspectus', in M. Shibatani (ed), *Syntax and Semantics* 6: pp.1-42. New  
York: Academic Press.

Simpson, J. 1983. 'Resultatives', in L. Levin, M. Rappaport and A. Zaenen (eds.),  
*Papers in Lexical-Functional Grammar*: pp.143-157. Bloomington: Indiana  
University Linguistics Club.

Sybesma, Rint. 1999. *The Mandarin VP*. Dordrecht: Kluwer Academic Publisher.